■シンポジウム

第 4 回風景デザインワークショップ初日の基調講演は、玉川孝道氏（西日本新聞会館取締役社長）と養父信夫氏（「九州のムラ」編集長）をお招きし、お話を伺いました。

まず玉川氏に「風景街道をどうつくるか？」というテーマで講演をして頂きました。アメリカで特派員として過ごした際に見たシーニックバイウェイの魅力をもとに、日本の風景街道はどうあるべきか、どういう基準で認定するべきか、等についてお話しされました。

次に養父氏に「風景、風土、風味、風習、風格、風情･･･ムラに吹く風をマチへ」というテーマで、マチとムラをつなげる活動の中で見聞きしたたこと、特に都市農村交流を中心に講演して頂きました。

講演会終了後は、柴田久氏（福岡大学准教授）をコーディネータに、玉川氏、養父氏をパネリストにパネルディスカッションを行いました。まずは玉川氏に風景街道のねらいや現状、課題など、養父氏に衰退していくムラを生き生きさせるための解決策など、講演に関してもっと踏み込んだ話を伺いました。また、お二方ともメディアに携わっていらっしゃるというご経験から、私たちが考えている風景デザインの意義や意味について社会にどう発信していったらよいか、アピールしていくためのポイントについてお話し頂きました。会場からの質問では、行政や景観の専門家、技術者との関わり方、閉じていく地域についての考え方等について意見交換がなされました。

【講演①：玉川孝道氏「風景街道をどうつくるか？」の要約】

風景街道とは、観光に役立てるために、単に今ある風景を認定するだけのものではなく、その地域の自然環境や都市環境、食、文化、歴史などを含めてつくり、育てていくものである。そのために地域がどのように風景街道をつくっていこうとしているか、地域と共に成長する風景街道をどうつくるか、という点が問題である。加えて、その場に足を運んで佇むことによって景観を体で感じること、つまり体験が大事である。

アメリカのシーニックバイウェイの‘バイウェイ’とはメインの高速道路ではなく、そこからの’寄り道’である。つまり大都市をつなぐ道路から脇道や小さな田舎に人を落とすことがシーニックバイウェイの本来の役割である。長崎の風景街道を考える際には、例えば佐世保の街をどのように活性化していくかを考えることが大切であり、単なる観光運動ではなく、地域興しとして捉えることが重要である。

人間の営みが入って初めて景観が生まれる。景観は生きている。その風景のそこで何が起こっているのか考えなければ景観というものを考えることにならない。「風景街道は九州が美しい国土、暖かい心と、皆が暮らせるところであり続けるための一つの手立て、道具」と捉えることが重要です。

【講演②：養父信夫氏「風景、風土、風味、風習、風格、風情･･･ムラに吹く風をマチへ」の要約】

日本の神社が衰退しているという実態は、ムラの力が無くなってきていることを示している。「ムラ」とは人が群れるところ全てを指し、風景、風土、風味、風習、風格、風情、風俗という 7 つの固有の風が吹いている。この 7 つの風をムラの人たちに再認識してもらい、マチとの交流のキーワードにしていこうという取り組みを、「ムラの生命をマチの暮らしに、マチの活力をムラの生業に」という理念を基に行っている。

宮崎県のひむか神話街道は、街道を通過するだけでなく、ムラの人と交流し、ムラにお金を落とす、ムラが元気になる仕組みづくりが行われている。宿泊、地域資源（食資源）、ガイドを軸に、地域を六次産業化し、マチの消費者との交流を生み出すことが狙いである。

最近は、車･ブログがマチとムラをつなぐ Gazoo Mura に取り組んでいる。ムラとマチ、行政、メディアをつなぐつなぎ役の不足が問題であり、その解決策として若者の力がポイントとなる。

写真：パネルディスカッションの様子

■事例発表会

第 4 回風景デザインワークショップ 2 日目は、福岡市のかなたけの里公園と五島市の下五島地域文化的景観調査･五島市景観計画を対象として事例発表会が行われました。

事例発表①：「米づくり・公園づくり・地域づくり」

石橋知也氏（福岡大学助教）をコーディネータに、大賀富雄氏（金武校区まちづくり協議会会長)、藤間計公氏（福岡市)、徳永哲氏（㈱エスティ環境設計)、木藤亮太氏（同左）をパネリストとして、「米づくり･公園づくり･地域づくり」というテーマで事例発表を行いました。前半は藤間氏、木藤氏、大賀氏より、行政、コンサルタント･NPO 法人、住民というそれぞれの立場から事例報告が行われました。

後半の質疑では、地域住民との関わりや、かなたけの里公園の特徴について、また福岡市の考えなどについて意見交換し、理解を深めました。会場からも観光的農地との違いや、維持管理制度について、地域住民へのメリットについて等の疑問が投げかけられ、活発な議論が行われました。

【事例紹介①の要約】

かなたけの里公園は、橋本駅から約 3km のところにあり公園までの道のりには史跡が多く、周辺は農業が主たる産業であり、周辺には大規模な住宅地もあり新しい住民も入ってきている。計画するにあたっては横浜市鶴岡公園等の類似事例を視察にいき、参考とした。

また、自然を生かした公園、地域振興のための公園をつくることを目的にスタートしたが、地域主体の動きが起き始めてきたことをきっかけに NPO 法人環境文化プロジェクト機構としての活動が始まった。現在、金武地区の元々の営農活動を調べながら、それに即して体験活動のプログラムを作成している。米づくりやぶどうづくり等、部会を 10 立ち上げて活動している。

こういった活動を地域はどう受け止めているか、現時点でどういった問題点があるのか、今後どういった問題点が予想されるのか。1 つ目の問題点は、事業者と住民の間に‘新しい公園’の捉え方にギャップがあること。2 つ目の問題点は、農業公園での収穫物が地域の農業生産者にどのような影響を与えるかということ。3 つ目の問題点は、公園にたくさんの人が出入りするようになったとき環境にどんな影響を与えるかということ。それぞれの問題点に対し、一時的な解決策があっても、派生的に問題が発生することから、今後まだまだ議論の必要がある。しかし、そう言った問題を乗り越えて、「自然は生きている」ということをかなたけに来た方が体験できるような公園をつくりたいと思っている。

事例発表②：「文化的景観の持続にむけて」

高尾忠志氏（九州大学特任助教）をコーディネータに、木方十根氏（鹿児島大学准教授)、福島綾子氏（九州大学助教）をパネリストとして、「文化的景観の持続にむけて」というテーマで事例発表が行われました。

事例報告終了後は、会場との意見交換が行われました。文化的景観の対象や価値について、様々な意見が出され、時間を延長するほど白熱したディスカッションとなりました。

【事例紹介②の要約】

文化的景観は、平成 16 年の文化財保護法の改正によりできた文化財の新しいカテゴリーである。より一般的には「自然環境に対し、人間が、生業・居住・造形などの作用を加えた結果形成された景観」として定義される。

「下五島の文化的景観調査」では、現在、下五島のキリスト教に関連する景観の要素や変遷を調査している。具体的には、居住の変遷、教会の維持管理方法、目に見えない景観を構成している要素等がある。

文化的景観の持続のための計画策定にあたっては、人間の活動をどう支えるか、景観の変化をどう管理･受容していくか、景観の衰退をどう受容していくか、という点が課題となる。

五島市の奈留島にある江上教会は、これまで信徒の奉仕活動により維持管理が行われてきたため、維持補修費は非常に少なくて済んだし、日常的で、心のこもった、きめの細かい管理が行われてきた。しかし、現在は国の重要文化財となり、信徒自身による維持管理に制限がかかる上、大規模な補修工事が行われる場合には信徒の負担金が発生する。このことをどう捉えるべきか。文化的景観の価値は、単なるモノの価値ではなく、それをつくり、守ってきた人々の活動にあるのではないか。文化的景観の保全を考える際には、まずは集落の景観をつくってきたものを理解し、それに最大限の敬意を払うことが重要である。

五島には美しい景観が広がるとともに、課題もまた多く存在している。その原因は社会変化、景観に対する無関心、景観の意味・価値についての理解不足にある。景観を持続させていくためには、景観の価値や意味を意識化し、市民で共有し、関係者で調整･協働しながら進めていくことが重要である。その道具として景観法を活用していく際には、「景観の変容を許容し、それをマネージする」という発想が必要である。また、一般的には景観計画策定では基準作りが優先されがちであるが、体制作りや基本理念作りの方が重要である。

「五島は日本の縮図」であり、我々三人は五島での調査から日本全体へ問題提起できるようにしたいと考えている。

（2009.6.26　高尾）